

古代ロシア語シンタックスの一用法（場所の状況語としての所格）から見た「原初年代記」編纂についての一考察

金 田 一 真 澄

1. 本論文の目的

古代ロシア語シンタックスの特徴の一つに、名詞の所格形が前置詞を伴わずに単独で用いられ、場所の状況語となる用法がある。

(例) p. 176 ↓ 8 Начало княженья Изяславля Киевѣ. / 〈訳〉 Начало княжения Изяслава в Киеве.

(文献 No. 4 『原初年代記』 テキストより)

場所の状況語用法の場合、用いられる名詞は、地名（町名）が殆んどで、特に年代記文体において頻出している。(No. 2, p. 77; No. 18, p. 289; No. 19, p. 103)

本論文では『原初年代記』を資料として、そこに用いられている地名の単独の所格用法（単独用法）と、用法上ヴァリエーションの関係にある前置詞(в)付き所格用法（前付用法）の二つの用法を一定の割合で定量比較し、そこに表われる特徴的パターンを『原初年代記』の複雑な成立過程と結びつけて考察し、その結果を提示しようとするものである。

2. 定量比較前の予備知識

(1) 古代ロシア語の単独所格用法

現代ロシア語においては、前置格形の名詞は単独で用いられることはなく、必ずその前に前置詞（в, на など）を伴うが、古代ロシア語においては、場所や時の状況語として、また稀に述語動詞の補語として名詞の所格形が単独でも用いられた。

更にさかのぼって、スラヴ祖語の時代においては、前置詞を伴わない単独所格用法は、前置詞を伴った所格用法と同じくらい、時にはそれ以上に広範囲に用いられたと推定される。

場所の状況語に限っていえば、スラヴ祖語の時代には、地名だけでなく、普

通名詞の所格形もさかんに単独で用いられた。それが古代ロシア語の時代になって、普通名詞の用法が衰退し、地名の単独所格用法だけが残し、しかも前置詞（В など）を伴った用法と競合する形で用いられるようになった。しかしその地名による単独所格用法もその後13～15世紀の間にほぼ消滅してしまった。

このようにロシア語において、単独所格用法が衰退し前置詞付きの用法が代わって多用されるようになった背景には、こうした分析的用法が、発達した社会の情報手段として、より適していたのではないかと見られている。（No. 8, p. 89; No. 12, p. 47-8; No. 13, p. 23; No. 17, p. 150; No. 20, p. 106）

またなぜ『原初年代記』が編纂された11～12世紀において、他のスラヴ語では消滅してしまった地名の単独所格用法が、東スラヴ語だけに残ったのかという問題は、いまだにはっきりしていない。

メイエは、その原因を当時のロシア社会の後進性によると説いているが、（No. 26, p. 270）一方ラーリンは単独所格用法は偶然『原初年代記』にもちこまれたロシア北方の一方言用法にすぎない、と論じている。（No. 9, p. 215）

（2）『原初年代記』

『原初年代記』は、ギリシアのプロニカを手本にロシアで独自に編纂された編年体形式の「年代記」であり、ロシア諸公に対する平和統一の呼び掛けが作品全体を貫くモチーフとなっている集本である。

『原初年代記』の編纂過程はきわめて複雑で、シャフマトフ及びその弟子達の提唱するところによれば、次のような幾つかの編纂段階が存在する。

- 1) （1030年代末） 最古の集
- 2) （1070年代） ニコンの集
- 3) （1093—5年） 原初の集
- 4) （1113年） ネストル編『原初年代記』
- 5) （1116年） シリヴェストル編『原初年代記』

この分け方が、学会のすべての研究者たちの支持を得ているわけではないが、（例えばルイバコフのように 1）より更に古い996年頃に『原初年代記』の原形の段階があったと指摘する学者もいる。（No. 16, p. 174, p. 188））現在ほぼ定説に近いと思われる。

ネストル編の『原初年代記』（1113年）の原本は、いまだに見つかっておらず、現在知られている『原初年代記』の写本のうち最も古いものは、ラヴレンチイ写本と呼ばれるもので1377年に書かれている。ただしこの写本は5）（1116年版）シリヴェストル編『原初年代記』の写本と推定されている。

ヴィノグラードフの指摘にもあるように (No. 1, p. 18) 『原初年代記』の言語学的研究は、まだまだ十分ではなく、現在シンタクスの研究においては、カールスキイ (No. 7, 8), カポルーリナ (No. 5, 6) などの研究があるにすぎない。前者は、例のみを挙げ内容の説明が十分でなく、後者は対象が定語や補語など一部の文法機能の研究に限定されている憾みがある。

3. 単独所格用法と前付所格用法の定量比較の方法

『原初年代記』のテキスト (全部で約260ページ) (No. 4) を10ページごとに26等分に分割し、その中に出てくる地名の単独所格用法と前置詞付き所格用法 (ヴァリエーションと考えられる B + 所格形) の使用回数を各区分ごとに計算する。計算結果を、横軸にページ、縦軸に両用法の使用頻度数を表わす座標上にプロットし、グラフを作成する。《グラフ1》。

テキストとして採用したのは、トポロゴフ校訂の『原初年代記』(1978年)で、最近出版されたりハチョフ等の編纂になる「古代ルーシの文学的記念碑」シリーズ第一巻に収められている作品である。このテキストは、定評ある1950年版リハチョフ編『原初年代記』(No. 10) と殆んど変わっていない。ただ現代ロシア語訳の方に、若干の訂正が見られる。

4. 定量比較の結果

結果は《グラフ1》“『原初年代記』における地名の〈単独所格用法〉と〈B + 所格用法〉の使用頻度の関係”に表わされている。

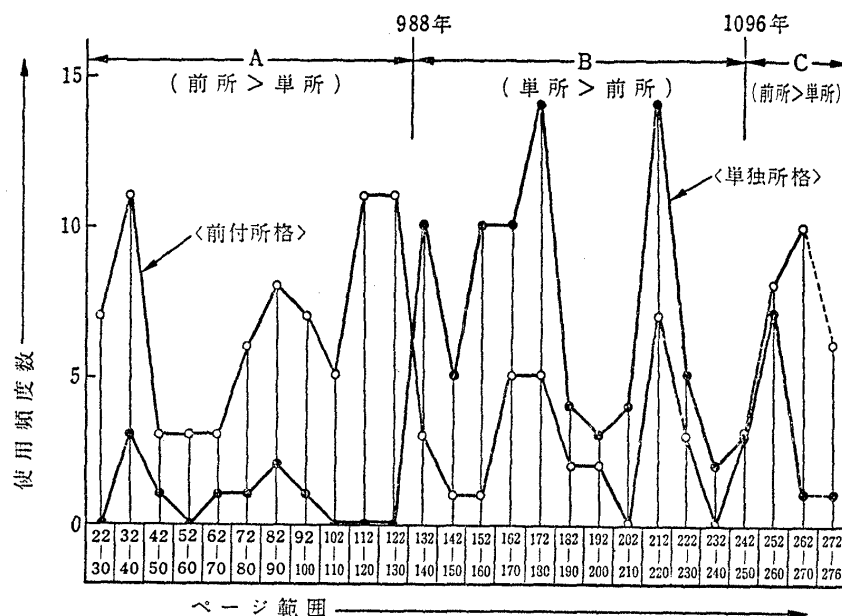
このグラフを見ると、前半においては〈前付所格〉用法が優勢であり、後半においては〈単独所格〉用法が優勢で、最後の方で再び〈前付所格〉用法が優勢になっていることがわかる。

これら3つの領域をそれぞれ便宜的にA, B, Cとすると、AとBとの境界は、『原初年代記』の内容では988年頃、丁度ヴラジミルが、キリスト教を国教として受け入れた年である。またBとCとの境界は、1096年頃、モノマフらがキエフ国家の立て直しをはかって活躍し始める頃である。

このように2つの所格用法を比較してみると『原初年代記』に3つの領域が浮かび上がってくることがわかる。

これらABCの3つの領域は、グラフからきわめて明瞭であるにもかかわらず、今までこれをはっきり指摘した研究論文はないように思われる。トポロフ (No. 22, p. 17) とグリゴリエバ (No. 3, p. 134) の研究に部分的に触れた簡

《グラフ1》(Рис. 1) “『原初年代記』における地名の〈単独所格用法〉と〈B+所格用法〉の使用頻度の関係”(テキスト: 文献 No. 4)



所があるにすぎない。この二人の研究については、後で述べる。

この3つの領域を『原初年代記』の編纂過程と結びつけ、以下に考察を行なう。

5. 考 察

(1) 時代による分析

地名による場所を表わす単独所格用法は、古代ロシア語の時代に、だんだんと分析的形態(具体的にはB+所格形)へと移っていった。その時期は、研究者達によってまちまちであるが、大体13~14世紀頃と思われる。

ところが筆者の結果《グラフ1》では、あたかも前付用法から単独用法へと移行しているような印象を与えている。このことは明らかに歴史的な流れに逆行している。この矛盾を説明するためには、『原初年代記』の編纂過程に目を向けてみる必要がある。

『原初年代記』が初めから順番に内容の古い順に幾人かの編者達によって自分達の文体で書き連ねられていった作品であると考えから、上のような矛盾が起こってくる。『原初年代記』の編纂執筆が必ずしも内容の古い順でなかっ

たり、また古い前半の内容を後の編者が大きく改変したりした場合を考えてみれば、このような逆の現象が起こったとしても、あながち不思議であるとは言えない。

実際、このように後から以前の古い内容を書き換えたり、新たなエピソードを挿入したりということは、さかんに行なわれたらしく、そのため内容の一貫性を欠く部分が随所に現われる結果にもなっている。

《グラフ1》の結果が、所格用法の歴史的な流れとして説明できないのは、そうした『原初年代記』の編纂の複雑さを物語っているといえよう。

(2) 出典資料による分析

『ノヴゴロド第一年代記』を資料に筆者と類似の実験（視点は似ているが方法はかなり大雑把と言える）を行なったグリゴリエバは、前半が前付用法優勢である原因を外国資料（ギリシャ語、古代教会スラヴ語）の多用にあると推論している。(No. 3, p. 134) 彼女の考察は、もっぱら『ノヴゴロド第1年代記』に向けられたものであるが、『原初年代記』にも一言触れた箇所があり、『原初年代記』における類似の現象も同様の理由によるものであらうと付け加えている。トポロフも同様の意見を述べているが、彼の場合はこのグリゴリエバの説を引用したものである。(No. 22, p. 17)

このグリゴリエバの外国資料多用説を2つの実験によって実際に裏付けてみよう。

まず『原初年代記』の中から外国出典部分を抜き出し、A、B、C 3つの領域に分けてその行数を数え、各領域での外国出典部分の割合を計算する。出典分類に関してはシャフマトフの研究データを拠り所とする。(No. 23) 民間伝承、ブイリーナなどの資料を出典とする部分の割合についても同様の計算を行なった。結果は《表1》に示す。

《表1》 “各領域での外国資料と民間伝承資料の使用割合”

出典 \ 領域	A	B	C
外国 (翻訳) 資料	37 (%)	4.2	0
民間伝承ブイリーナなどの資料	12	9	31

(テキスト：文献 No. 4)

《表1》からA領域で外国出典を利用した割合が他の領域に比べ、極めて高いことがわかる。

次に『原初年代記』の中の外国資料を利用した箇所において、実際に前付用法（B＋所格）が単独用法に比べて優勢であるかどうかを調べる。

《表1》と同じシャフマトフのデータを利用し、『原初年代記』の外国出典部分での地名の〈B＋所格〉用法と単独所格用法の頻度を数えてみる。民間伝承ブイリーナなどの資料を下敷きにした箇所についても同様の作業を行なう。結果を《表2》に示す。

《表2》 “外国資料及び民間伝承資料を下敷きにした箇所における単独所格と前付所格の使用頻度数”

出典 \ 用法	単独所格	B＋所格	(テキスト：文献 No 4.)
外国 (翻訳) 資料	2 (回)	22	
民間伝承ブイリーナなどの資料	13	7	

この表から『原初年代記』の外国出典部分では、前付用法（22回）が単独用法（2回）に比べかなり多用されていることがわかる。

以上《表1》《表2》から『原初年代記』の前半には外国出典を利用した部分が多く、また外国出典部分においては、前付所格用法の方が単独所格用法よりも優勢であることがわかる。これらのことから、上述したグリゴリエバの指摘がほぼ正しい事が確認された。

(3) 『原初年代記』の成立過程における集本編者の文体と、方言による分析
『原初年代記』の編纂過程における集本としては、既に述べたように次の3つが考えられる。

- ① 「最古の集」
- ② 「ニコンの集」
- ③ 「原初の集」

この3つの集本から『原初年代記』完成への時代的流れの中で最も重要視すべきなのは、一番新しい③「原初の集」であると思われる。ネストルは「原初の集」を下敷きに、その他様々な資料を駆使して『原初年代記』を編纂したが、1016年～1093年の間の記述は一部を除いて「原初の集」の文章を比較的そのまま生かして用いている。(No. 24, p. 11) つまりB領域では、ネストルは下敷きとしての「原初の集」にあまり筆を加えずに『原初年代記』を書き上げていると考えられる。(No. 15, p. 102-111)

また一方A領域では、ネストルは様々な資料（主に外国資料）を用いて「原初の集」を大々的に改編している。従って、A領域の文体にはネストル自身の文体が大きな影響を及ぼし、B領域では「原初の集」編者または「原初の集」が下敷きとしたそれ以前の集本編者らの文体が、中心文体となっていると考えられる。

「原初の集」については、シャフマトフによれば「ニコンの集」と古いノヴゴロドの集本を主に利用して編纂した集本ということであるが（No. 24, p. IV）、ルイバコフ、チホミロフ等のように、このような古いノヴゴロドの集本の存在を疑問視している研究者も多い。（No. 16, p. 194; No. 121, p. 63）

一方B領域の利用資料を考えてみると、外国資料の利用割合はA領域よりはるかに少なく（《表1》参照）、その代わりノヴゴロド地方の記述が1070年代までめだって頻出している。

B領域に、ノヴゴロド地方の記述が多い理由は、リハチョフは②の編者ニコンが、ヤンやヴィシャタ等ノヴゴロド人からノヴゴロド地方の話しを聞いて書きとったためである、という説を提唱しているが、シャフマトフは、上述したように「原初の集」編者が、ノヴゴロドの古い集本を利用したためであるという説を掲げている。

ラーリンは、単独所格用法は当時ノヴゴロド地方だけでさかんに用いられ、その他の地方では殆んど用いられなかったと推論している。その根拠として、当時のノヴゴロド、プスコフ領で使われていたラトビア語やリトワニア語の中に今でも前付用法と並んで、場所の単独用法が残っていることを挙げている。

（No. 9, p. 215）このラーリンの説を受け入れるならば、B領域でノヴゴロド地方の記述が多いことと、地名の単独所格が多用されたことが符合する。

しかし一方、トポロフはラーリンのこの説に反論して、「原初の集」の成立した11世紀末において、ノヴゴロドとキエフの各言語には方言的差異は問題視するほどではなかったと論じている。（No. 22, p. 17）

筆者もトポロフの説に賛成で、11世紀末のキエフの口語においては、単独所格用法の方が優勢だったのではないかと考えている。従って「原初の集」編者をはじめ、それ以前の編者は、自分の文体として単独所格優勢の文体を保持していたものと推定される。

（4）ネストル、シリヴェストルの文体による分析

ネストルはこの『原初年代記』以外に、「ボリスとグレーブの物語」と「フェオドーシー伝」の著者であるといわれている。彼の文体を知るためには、こ

これらの作品の分析が必要である。

そこで『原初年代記』のテキストと同じシリーズの中にある「フェオドーシー伝」(全88ページ)をとり上げ(No. 4, p. 304-391), 地名の単独所格用法と前付所格用法の各頻度の関係を調査した。

結果は《表3》に示す。

《表3》 “「フェオドーシー伝」における単独所格と前付所格の使用頻度数”

用法 \ 頻度数	回数
単 独 所 格	0
前 付 所 格	2

(テキスト：文献 No. 4)

用例は少ないが、この表からネストル自身の文体が前付所格優勢文体であることが推察される。(ただし前付所格の例は、2つとも定語が付いている地名であったため、証拠能力は若干落ちる。)

一方シリヴェストルについて考えてみると、リハチョフは『原初年代記』中の前半で、シリヴェストルの筆になると思われる部分が一箇所あり、それは“使徒アンドレーのルーシの風習の記録”であると指摘している。(No. 11, p. 170)

そこでネストルの場合と同じく、この部分の単独所格と前付所格の用法頻度の関係を調べ、結果を《表4》に示す。

《表4》 ““使徒アンドレーのルーシ風習の記録”における単独用法と前付用法の比較”

用 法	単独所格	単独与格	B + 所格	B + 対格
使用頻度数	0 (回)	0	2	4

(テキスト：文献 No. 4, p. 26)

この表から、もしシリヴェストルが翻訳資料を用いずにこのエピソードを書いたとするならば、シリヴェストルの文体も、ネストルの文体と同じく前付所格優勢文体であると考えられる。当時のキエフの口語においては、恐らく単独所格用法の方が優勢であると考えられるのに、この二人が前付所格優勢文体を用いた理由は、恐らく修道僧という身分・環境と深いかわりがあるように思われる。(No. 25, p. 300)

(5) C領域について

C領域は、「原初の集」が編纂された後の1096年から1110年までの範囲を示し、従ってここでの編者は、ネストルとシリヴェストルの二人しか考えられない。焦点となるのは、ネストルが最初執筆した内容をどの程度、シリヴェストルが改編したかということである。

シリヴェストルがこの『原初年代記』を改編するに当たっては、モノマフの命による、という説が一般的である。即ちモノマフが自分の栄光を誇示するために、『原初年代記』の中の自分に関する記述を都合のいいように書き改めさせたというのである。

もしそうだとするならば、ネストル編の『原初年代記』中のモノマフ自身が登場する部分がまず第一に加筆修正の対象になったはずである。

モノマフが『原初年代記』の中で活躍し始めるのが1093年頃であるから、それ以降の記述には、シリヴェストルの筆がかなり多く入っていると考えられる。(No. 11, p. 171)となれば、1093年から1110年までの範囲は、C領域ともほぼ一致するので、従ってC領域では、シリヴェストルの文体が内容に濃い影を落としていると言えそうである。

一方資料に関しては、民間伝承などの国内資料が多く用いられているが、編者の文体に影響を与える程のものではなかったように思われる。

6. 考察結果

以上の考察から、A、B、C 3つの領域と『原初年代記』編纂との関係を次のように結論する。

1) A領域

A領域において(単独所格) < (B + 所格)となった理由は、

- ①編者等（主にネストル）が数多くの外国資料（ギリシア語、古代教会スラヴ語）を直接なり、間接（翻訳文献の形で）なりに利用しながら『原初年代記』を編纂した事
- ②編者自身（主にネストルと考えられる）の文体が（B + 所格）用法優勢文体であった事

などによると思われる。

2) B領域

B領域において(単独所格) > (B + 所格)となった理由は、

- ①A領域と異なり、外国資料をあまり用いなかった事
- ②ネストル以前の集本の各編者自身が単独所格用法優勢文体で書いた事

②' ネストルが『原初年代記』を編纂する際に、B領域にはそれ程手を加えずに、下敷きとした「原初の集」の文体を比較的そのままの形で引き継いだ事

などによると思われる。②と②'は合わせて1つの条件になっている。

3) C領域

C領域において(単独所格) < (B+所格)となった理由は、ネストル及びシリヴェストルの文体が共に(B+所格)用法優勢の文体であった事によると思われるが、どちらかといえば、シリヴェストルの文体の方がより大きな影響を及ぼしていると考えられる。

古代ロシア語における単独所格用法の衰退過程と重ね合わせて、C領域の現象を説明するには、12世紀初めという時期は、若干早期すぎるきらいがあるように思われる。

7. 補 足

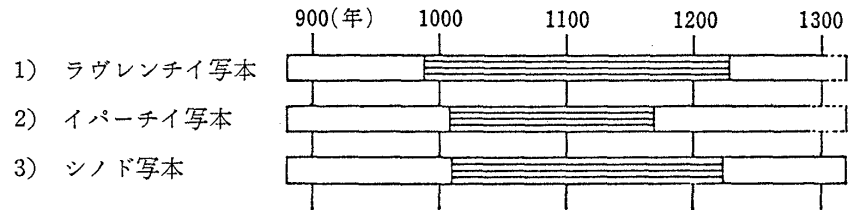
以上の考察において、写本と原本との比較の問題については一言も触れなかった。筆者が拠り所としたラヴレンチイ写本(1377年)とその原本であるシリヴェストル編『原初年代記』(1116)年との間には約260年の歳月が経過しており、その間に幾人かの写本の写し手の介在が予想され、彼らが写し継ぐ過程で原文が徐々に変質していったとしても不思議はない。実際、ラヴレンチイ写本は原本とは文法・文体的にかなり異なったものになってしまっているといわれている。

これは他の年代記の例だが、古い単独与格用法(方向を示す)に後世の写し手が勝手に前置詞“к”を挿入したと思われる写本が見つかっている。(No. 14, p. 13, 14)

ラヴレンチイ写本においても同様の書き換えや写し違いは十分考えられる。そこで、単独所格用法と前付所格用法の数量的比較から生まれたABCの各領域が、写本の写し手の操作によって生じたものではないということを、以下に証拠とともに示しておく。

《グラフ2》は、ラヴレンチイ写本、イパーチイ写本、シノド写本における単独所格用法のよく用いられた領域を表わしたもので、トポロフの研究データ(No. 22, p. 15)を筆者がグラフの形にまとめたものである。縞のある部分が多用された領域を表わしている。

《グラフ2》 “年代記写本における単独所格用法のよく用いられた領域”



このグラフから、どの写本にも A. D. 1000年前後に単独所格用法が頻出し始める時期が存在する。これは即ち、A領域とB領域の境界に他ならない。

このようにラヴレンチイ写本だけでなく、他の写本にも A, B領域の境界が時期をほぼ同じくして存在するということは、写し手による操作によって A, B, C各領域が形成されたのではないという有力な証拠となる。

また別の証拠としては、単独所格用法と前付所格用法が『原初年代記』の中で、それぞれ一定の規則性をもって用いられていることが挙げられる。例えば、

- 1) 外国地名の場合には、必ず前付所格用法が用いられる。
- 2) 単独所格用法に用いられる地名は必ず国内の地名である。
- 3) 地名に定語が付加している場合には、必ず前付所格用法が用いられる。
- 4) 更には《表2》から、外国資料を利用した部分では前付所格用法が優勢で、国内資料を利用した部分では単独所格用法が優勢である。

こうした規則性をもって使い分けが行なわれているということは、写し手の旧文法に対する無知やきまぐれによる写し変えを否定する証左となりうると考えられる。

文 献

1. Виноградов, В. В. “Основные проблемы изучения образования и развития древнерусского литературного языка” (“Исследования по славянскому языкознанию” М. 1961)
2. Георгиева, В. Л. “История синтаксических явлений русского языка” М. 1968.
3. Григорьева, А. Д. “К отношениям предложности и беспредложности локатива в древнерусском языке” [[Доклады и сообщения института русского языка, АН СССР вып. 1]] М.-Л. 1948.
4. Дмитриев, Л. А., Лихачев, Д. С. “Памятники литературы древней Руси XI-начало XII века” М. 1978.
5. Капорулина, Л. В. “Винительный падеж при имени существительном в древнерусском языке (на материале “Повести временных лет”)” [[Ученые

- записки № 302 вып. 61]] Л. 1962.
6. Капорулина, Л. В. "Дательный падеж при имени существительном в "Повести временных лет"" (К вопросу управления приглагольного и приименного) Рига 1957.
 7. Карский, Е. Ф. "Из синтактических наблюдений над языком лаврентьевского списка летописи" Сб. ОРЯС т. CI № 3 Л. 1928.
 8. Карский, Е. Ф. "Наблюдения в области синтаксиса лаврентьевского списка летописи" Сб. ОРЯС т. 11 кн. 1 Л. 1929.
 9. Ларин, Б. А. "Лекции по истории русского литературного языка X-XVIII вв." М. 1975.
 10. Лихачев, Д. С. "Повесть временных лет" М.-Л. 1950.
 11. Лихачев, Д. С. "Русские летописи и их культурно-историческое значение" М. 1947.
 12. Ломтев, Т. П. "Из истории синтаксиса русского языка" М. 1954.
 13. Ломтев, Т. П. "Очерки по историческому синтаксису русского языка" М. 1956.
 14. Правдин, А. Б. "Дательный приглагольный в старославянском и древнерусском языках" ("Ученые записки института славяноведения" т. XIII М. 1956)
 15. Приселков, М. Д. "Нестор летописец" Петербург 1923.
 16. Рыбаков, Б. А. "Древняя Русь: сказания, былины, летописи" М. 1963.
 17. Спринчак, Я. А. "Очерк русского исторического синтаксиса: Простое предложение" Киев 1960.
 18. Срезневский, И. И. "Мысли об истории русского языка" СПб. 1850.
 19. Станишева, Д. "Беспредложный дательный и винительный локальной функции в славянских языках" ("Известия на института за български език" кн. XI София 1964)
 20. Стеценко, А. Н. "Исторический синтаксис русского языка" М. 1977.
 21. Тихомиров, М. Н. "Источниковедение истории СССР. т. 1" М. 1962.
 22. Топоров, В. Н. "Локатив в славянских языках" М. 1961.
 23. Шахматов, А. А. "«Повесть временных лет» и ее источники" ("Труды отдела древнерусской литературы" IV М. 1940)
 24. Шахматов, А. А. "Разыскания о древнейших русских летописных сводах" С.-Петербург 1908.
 25. Якубинский, Л. П. "История древнерусского языка" М. 1953.
 26. Meillet, A. "Les langues dans l'Europe nouvelle" P. 1928.
 27. Trautmann, R. "Die altrussische Nestorchronik povest' vremennykh let" Leipzig 1931.

К отношениям предложности и беспредложности локатива с пространственным значением в языке “Повести временных лет”

Масуми КИНДАЙТИ

В “Повести временных лет” наблюдается две падежные формы с пространственным значением, которые являются обычными для древнерусского языка дублетами — беспредложная форма локатива от названий городов (например: Киевѣ, Новѣгородѣ) и предложная форма локатива от названий городов (например: въ Киевѣ, въ Новѣгородѣ). Беспредложный локатив такого рода встречается всего 102 раза, предложный локатив — 131 раз. Целью данной статьи является выяснение отношений предложного и беспредложного локативов места в “Повести временных лет”.

Количественный анализ распределения обеих форм в “Повести временных лет” позволяет выявить и показать следующую характерную диаграмму, которая разделяется на три временных области (см. Рис. 1).

1. С начала — до половины 988 г.
преобладание предложного локатива над беспредложным локативом (область А)
2. С половины 988 г. — до 1096 г.
преобладание беспредложного локатива над предложным локативом (область В)
3. С 1096 г. — до конца
преобладание предложного локатива над беспредложным локативом (область С)

Эта характеристика кажется чрезвычайно отчетливой, но нам еще не попадаются такие исследования, которые прямо трактуют об этих трех областях (А, В, С) в “Повести временных лет”. Поэтому мы сначала рассмотрели сложную схему развития древнерусского летописания, потом исследовали с этой точки зрения причину формирования трех областей в “Повести временных лет” и пришли к следующим выводам.

1. Причиной, почему в области А в “Повести временных лет” преобладает употребление предложного локатива места, является то, что во-первых, в области А, содержащей изложение событий предыстории, летописцы часто использовали в качестве исторических источников летописи материал переводных памятников письменности на старославянском языке (беспредложный локатив места от названий городов очень редок в старославянских

памятниках письменности), и, во-вторых, сам стиль летописцев в области А (большей частью, вероятно, стиль Нестора) является стилем, в котором преобладает предложный локатив места над беспредложным.

2. Преобладание беспредложной конструкции в области В происходит по той причине, что в этой области, главным образом, используются оригинальные русские памятники, следовательно, влияние старославянского языка на стиль летописи незначительное, и при составлении "Повести временных лет" Нестор в почти неисправленном виде использовал стиль изложения в "Начальном своде", в котором подавляющее большинство собственных имен в функции места выступает в беспредложной форме.

3. В области С преобладает употребление предложного локатива места от названий городов. Это объясняется тем, что и Нестор, и Сильвестр, составители этой области, описали ряд исторических событий в стиле, в котором преобладает употребление предложной конструкции.